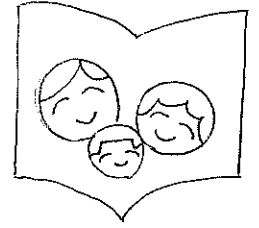


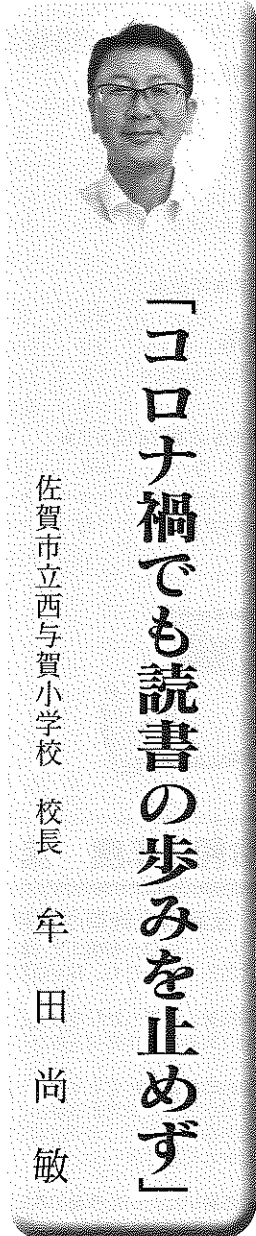
親と子の読書新聞

OYA TO KO NO DOKUSYO SINBUN



発行所 佐賀県親と子の読書会協議会 〒840-0041 佐賀市城内2丁目1-41
佐賀県立図書館内 (Tel 0952-242900)

二〇二二年 第七十五回 「読書週間」
「最後の頁を閉じた」
「連つ私がいいた」



「コロナ禍でも読書の歩みを止めず」

佐賀市立西与賀小学校 校長 牟田尚敏

最近『余暇』について書かれたエッセイや論文によく出会います。働き方改革と余暇であったり、障がいをもつ人の余暇であったり、はたまた、Society5.0社会での人間の生活と余暇など、数々の文脈で余暇が語られています。まさにいろいろな角度から質の高い余暇の過ごし方が問われる時代ですが、今最も注目されているのが『コロナ禍の余暇』ではないでしょうか。そこでの「読書」の役割は大変大きいと私は考えるのです。

一口に読書といっても、最近その形態は様々に広がっています。特に電子書籍の台頭は目覚ましいものがあり、スマホやタブレットさえあればいつでも手軽に読むことができます。また、耳で聞く本（オーディオブック）やスマホ

の読み上げ機能なども充実し、視覚的情報が入りづらいお子さんにとっては物語の世界に入りやすい環境となりました。読書の間口が広がり、多くの人が読書の魅力に触れる機会が多くなったことは、教育の世界に身を置くものとしても大変嬉しく感じます。

しかし、昨今のコロナ禍にあつて、制限されてしまった読書の楽しみ方があります。それは、本を通じて人と人がつながることです。本校には「あしのご読み語り」というボランティアグループがあります。語りの表情や声の調子から、子供たちは自分の想像を超えた世界へ誘われます。子どもたちは目を輝かせて、同じタイミングで息をのみ、同じタイミングで笑い、その世界に没入していきます。そ

して、「おしまい。」という魔法の言葉で、ファンタジーから現実の世界に引き戻され、「面白かったね」「うん。うん。」と友達との会話も弾んでいきます。まさに一冊の本がもとになり、語り手と聞き手、聞き手同士がつながっていくことも読書の大きな楽しみの一つだと感じるのでした。

『コロナ禍でも読書の歩みを止めない。』その思いで本校の図書館司書をはじめとする先生方はいろいろな取り組みをしてきています。『しおりコンクール』や『本に出てくるメニューを給食で』『多読賞の表彰』『各学年おすすめの本』などの取り組みは子どもと本の世界を身近なものにしてくれています。そして、コロナ禍だからこそ、『家読』の取り組みに重点をおいて企画

しています。出歩くことがはばかられる今だからこそ、家族で読書を楽しみ、つながりを深くするチャンスと考えているのです。先日ある学級では、学級での読書会（本のプレゼン大会）が行われていました。『おうちの人に読んでほしい本』と題して、四人の子供たちが自分のおすすめの本を紹介していきます。人との間隔を取りながら、本を中心として言葉でやり取りし、つながりを深めていく姿に大変安心しました。

熱戦が繰り広げられた東京パラリンピックは、質の高い余暇の使い方（スポーツ）がその人の生きる力となり、それが多くの人々にも力を与えていることを我々に雄弁に語ります。私もスポーツは大好きです。しかし、コロナ禍にある今だからこそ、本と子供たちの関係を密にし、本を中核にして人と人をつなげる『読書の時間』を大切にしていきたいと考えます。